

未来の農業ライフ体験

ICT（情報通信技術）などを活用した「スマート農業」の研修会が、県立篠山東雲高校（丹波篠山市福住）で開かれた。生徒や農家、行政職員ら約20人が、無人で耕作するロボットトラクターの実演を見学するなどし、先進的な農業技術を体感した。

（中野真一）



参加者が見つめる中、無人で動くロボットトラクター

篠山東雲高生ら 無人運転や無線草刈り機



遠隔操作で動く草刈り機（いずれも丹波篠山市の篠山東雲高校で）

国は、高齢化や後継者不足が進む農業を活性化させる「切り札」としてスマート農業を推進。長引く新型コロナウイルス禍の下、外国人実習生がなかなか入国できないなどの状況を受け、農業労働力確保緊急支援事業として導入を積極的に進めている。

篠山東雲高はこの事業で、大型のロボットトラクター（約1300万円）と、無線草刈り機（約100万円）を購入した。

ロボットトラクターは、カーナビなどに搭載されている全球測位システム（GPS）を利用し、数十センチの誤差で地点を特定できる。研修会では農機具メーカーの担当者らが、農園に見立てた校庭の形状をタブレット端末に登録して作業範囲を決め、トラクターが自動で前進や後進、旋回する様子を披露した。

ロボットトラクターの導入には縦50メートル以上、横30メートル以上の農園が必要。参加し

た農家の人たちは「耕地面積が大きすぎる」「価格が高い」などと課題を指摘した一方、「女性や熟練されていない作業員でも扱え、省力化につながる」と期待もしていた。

無線草刈り機は40度までの斜面で幅約60センチの範囲を高さ4センチまで刈り込めるのが特長で、生徒らは交代で遠隔操作を体験していた。

研修を実施した同校のスタッフは「車の無人化が間近な時代。生徒たちが今から習熟することが大切だと思ふ」と話していた。

読売新聞

2021年4月11日